
唯一の治癒剣士

早市賢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

唯一の治癒剣士

【Nコード】

N5733Y

【作者名】

早市賢

【あらすじ】

五歳の時、『無能』と診断されたルークは、強くなるために剣を極める。

しかし、実際彼は無能なんかではなく……

世界でたった一つの才能に愛された少年の最強物語！

誓い（前書き）

拙い文章ですが、少しでも満足していただけたら幸いです。

誓い

「やーいやーい、この無能がつ！」

そう言われて、少年は石を投げつけられた。
体重の乗った、いいフォームで放たれた石は少年の脛の上にガツツと衝撃を与える。

「いつてー……」

涙目になりながら少年は、眼の前にいる同い年の子供たちを睨みつける。

子供たちは全員で八人。とてもでないが、少年一人でどうこうできる人数ではなかった。

八人の内のリーダーのような、その年にしては大きい男の子はニヤニヤしながら手に石を持つ。

「何だよその眼は……よっ！」

ガツン

また投げられた。

今度は左の頬。石の角に当たったらしく、皮膚が切り裂かれて赤い血がつーつと流れる。

だが少年は構わず睨みつける。

「オイオイ無能のくせにいつちよまえに睨みつけてるぜ」

「ああ、しかも無能のくせに血が赤いぞ！」
「ああ、世界一の無能のくせに生意気だな」

少年の周りから様々な悪口が飛んでくる。
そしてその一言一言が少年の胸の奥に抉るように突き刺さる。

少年は今にでも胸を押さえて泣きたくなるのをこらえて、必死に虚勢と言う名の睨みを利かせていた。

……だが、もう限界だった。

少年は目の前にいる子供たちから離れるべく体を動かした。

とここで、

「おっと！ 手が滑った！」

リーダーのような男のは少年の横っ腹にドロップキックを見舞った。
「ぐふっ」と、腹から無理やり息を吐き出させるような声を上げて少年は倒れる。

腹を抱え痛そうに包まる少年をよそに、子供たちは次々と「手が滑ったー！」と言って蹴りをぶつけてくる。

（痛い……痛い痛い痛い痛い！）

涙があふれてくる。

苦しくて、痛くて、悔しくて……。

「つか、これって足じゃねーか？ 手じゃないぞー！」

情けなくて、悲しくて、カッコ悪くて……。

「あ、そうだな。あはははははははっ」

（全部……全部あの日がいけないんだ！ あの日さえ来なければ、俺は今頃楽しくやっていけたのに！ こんなに痛い思いも辛い思いもしなくて済んだのに！）

そう、あの日。

少年にとって、すべてが色褪せた日。

それと同時に全てが、これからの未来さえも変えた日だ。

剣と魔法の世界。

この世界では剣の努力と魔術の才能が、人々の生活を大きく動かしていた。

訓練次第では底辺にでも頂点にでもなれる剣。

それとは真反対に五歳までである程度将来のレベルが分かる魔法。

二つは正反対だ。

『動』の剣と『静』の魔法。

そしてどちらも力だ。

だが、国が強く求めるのは当然のように魔法だった。

才能は限られたものにしか与えられない。

さらに言えば才能はその実力の差を顕著に表している。とてもでないが、努力で覆せるものではない。いや、覆せるのなら、それはその程度という認識になる。そう言うレベルだ。

才能のある者と才能のない者への道は二点において判断される。

一つ目は所有属性の数。

魔法には属性がある。

火、水、土、雷、風、光、闇の計七つだ。

どんな者でも一つは属性を持っている。

これは世間の常識である。

そんな中で、ピラミットのように二個持つ者は一つ持つ者よりも人数が少なく、三つ持つ者は二つ持つ者よりも人数が少なく……となっている。

その差は圧倒的で、二個以上持っている者は、世界人口の四分の一に満たない。

そして才ある者は、普通は三つ以上は所有している。

二つ目に魔力量だ。

人間の体内に保有されている魔力の量。

これはまだ検査方法が確立されていないわけではないので、はつきりと区切り線を付けることが出来ないが、その量によっては、所有属性の数を覆すことが可能と言われている。

以上の二点から、その者の才能の有無が決定される。

そして国の決まりで五歳になった子供を検査の対象としている。

少年は二年前、村の子供たちとみんなで検査を受けた。

当時の彼らは、その検査にどんな意味があるかなんて理解しているはずもなく、誰ひとり緊張感を出さずに気楽に、いつもみんなで遊んでいる時みたいに屈託のない笑顔で会話していた。

次、と少年は呼ばれて検査室の中に入っていく。

検査室とはそのままの意味で、検査する部屋だ。

明かりの灯されていない一室の中央に、机が配置されその上に水晶が置いてあり、傍に二人の男が立っていた。

「では、この水晶の上に掌を当ててください」

子供に対して敬語なのに、少年は首をかしげながら、自分の手を水晶の上にかざした。

「……………」

「……………」

しかし何も起こらなかった。

「ど、どういうことだ？」

「さ、さあ……もしかしたら水晶が壊れたんじゃないか？」

「ああ、なるほど」

男達は焦りながらも、自信の中で納得のいく結論にたどりつき、水晶を新しいのに変えた。

「さあ、気を取り直して、どうぞ」

少年は言われたとおりに掌をもう一度かざす。

「……………反応がないぞ」

「……………これは一体」

驚愕に口をみつともなく開けている男達を見て、少年は面白そうに笑った。

その後の下される検査結果のことなど、知る由もなく。

「こらぁーっ！ あんた達何してんのよ！」

みつともなく蹴られている少年の耳に、キーンとつんざく高い女の子の声が聞こえた。

「げー？ エリーかよ！？ みんな逃げるぞ！」

こっちに大声で叫びながら駆けてくる女の子を見て、リーダーの男の子は顔を青い色に変えて、反対方向に走り出した。

「あ、こら！ 待ちなさい！」

と、少女が叫ぶものの、「待てと言われて待つバカはいない！」とカッコよく逃げの決め台詞を吐いて、子供たちはどこかへ逃げ去ってしまった。

「ルーク！ 大丈夫！？」

少女は少年の前に立つと、先ほどの鬼のような顔はどこへ行った、と聞きたくなるほど心配そうな表情をしている。

「ゴホッゴホッ……だい……じょうぶ、ゴホッゴホッ」

苦しそうに咳を吐きだし、空気を求める。先ほどまでは何度も何度も蹴られていたため、呼吸すらままならなかったのだ。そんな少年を見て、少女は再び顔を怒りで覆い尽くす。

「……あいつら……いい加減にやり過ぎだよ。私がつぶしてくる！」

「待って！」

激情のままに突き進もうとした少女を少年はすぐさま止めた。

「別に……いい」

「いいって……だって、ルークがこんなにされたんだよ！？ もういい加減黙ってられないよ！」

「……俺は大丈夫だから」

「だって……だって……ルーク、このままだと死んじゃうよ？ あいつら、絶対調子に乗ってるもん！」

「大丈夫、大丈夫だから……」

涙目になっている少女の髪を少年は優しくなでる。

始めは涙目の上目遣いで心配した顔をしていたが、その手心地がいのだか、少女は目を細め、今にでも「ゴロゴロニャー」とでも言いそうだ。

あの日、少年は『属性保有なし、魔力0』の『無能』と診断された。その結果を見た友達是指を指して笑い、大人たちは可哀そうなモノでも見るような、あるいは絶対にあるモノがない、ある種普通ではない少年に薄気味悪さを感じているような、そんな視線を送っていた。

変わってしまった。

今まで綺麗に輝いて見えたこの村が、いつの間にか自分を汚物とみなしている、いいようにない居心地の悪さを感じるようになった。

そんな中でも、少年の父親と少女だけは変わらなかった。

いつも通り接して、いつも通り話して、いつも通りに遊ぶ。

父親と少女がいたからこそ、少年は今を生きていける。
そう思えるほどに二人は少年の心を支えていた。

（才能なんて……関係ないっ！俺が弱いからだ！！）

だから、今、自分のために泣いてくれる、あるいは自分のせいで泣かせてしまった少女を見て、決心した。

「俺、剣を極めるよ」

「え？」

「こんな俺でも、エリーを守るくらいに、俺は強くなるよ」

少年は空を見上げる。

その景色は2年前から変わってしまった空だった。

だが、少し、空が笑っている気がした。

それは馬鹿にしているのではなく。

応援してくれているみたいだった。

決意（前書き）

開いていただいております。

決意

王国の中心都市、王都『ベルゼア』から約二十キロほど離れた地を覆う、立ち入り禁止地域、『鬼人の森』。

この森には、その名の通り鬼人が村をなして生息している。

なぜこの地が禁止地域に指定されているかというと、簡単な話、鬼人族と友好関係が掴めていないからだ。

世界には多くの種族が存在している。

人間族、エルフ、ドワーフ、獣人族、鬼人族、竜族、魔族。彼らは、村をなし、町をなし、国をなし、暮らしている。

ただ、世界は常に平和ではない。

違う種族が近くにいと、それだけで無性に嫌悪感が浮かび上がってくる種族もいるのだ。

その代表が人間族と魔族だ。

人間族は、自分たちこそが神に最も近い存在だと信じ、魔族は我こそが最強の種族であると確信している。

つまり、どちらも他種族を下等な生き物と思っているのだ。

もちろん、すべての人間がそう思っているわけではない。

中には他種族が持っている、人間では到底思いつかないような技術を学ぶべく頭を下げている者もいる。

しかし、やはり傲慢な人間の方が多いのもまた事実。

中には、平和を願っている種族の村を襲い、奴隷にするために連れ去るなんてことも、珍しいことではない。

そして、彼らがそう言う考えを持っていることを他の種族も知っている。

だからこそ、どの種族も人間族に関わろうとしないのだ。

鬼人族もその例に当てはまる。

ただ、例外もあるのだが……

鬼人の森の東部で、一人の人間が五匹もの魔物に囲まれていた。

魔物は、黒い体毛で覆われている四足獣のようだ。大きな尾を左右にゆっくり振って、人間を見つめている。

その目つきは獲物を狩るものだ。

せつかくの獲物を逃がさんとはかりに逃げ道を互いに封じあつて、のどをうならせている。口からこぼれているよだれは、すでに人間を食べることを確定していると言わんばかりに振りまかれていた。

一方人間は落ち着いていた。

だいたい十五、六の青年。

身長は百八十センチくらいで、細くはなく、だが決して太くもなく、至って普通の体つきをしている。茶髪の短髪に尖った目つき、鼻は

高く、ほっそりとした小顔の顔立ち。

随分と男前な顔をしていた。

青年は腰のベルトに吊るしてある細長い剣の柄に手をおいたまま、冷静に魔物を見つめ返していた。

「グルルルルルルッ！」

低いうなり声を出しながら、魔物は前足に力を溜めこみ、地を蹴った。

勢いのついた動きは、たった一步で青年の前まで到達させる。二歩目に行く際に口を大きく開け、唾液の糸を引きながら、魔物の自慢の牙で襲いかかってくる。

それが五匹同時で行われたのだ。

もはや青年に逃げる道はなかった。

そう、『逃げ道』はないのだ。

青年は素早くベルトから剣を抜きとる。

抜き取った際に放った剣閃で、一匹目を切り裂く。続いて体を捻り、回転するように剣をふるい、二匹、三匹目と、始末する。最後に残りの二匹の間を駆け通り抜けるようにして、剣をクロスに動かし、四匹、五匹目を片づけた。

圧巻の一言だった。

魔物が一斉に襲って来てから、全てを終えるのにかかった時間は一秒も経っていない。

そして、なによりすごいのは、そのわずかな時間に、的確に魔物のど元を切り裂いたことにある。

魔物の体皮は人間なんかと比べ物にならないくらいに堅い。

下手すれば剣の方が折れるかもしれない、それくらいに硬度があるのだ。

だが、のど元だけはほんのわずかだが、硬度が落ちると言われている。

これは実際証明されているが、魔物ののど元を攻撃するのはそれなりの技量がいる。

単純に考えて、魔物と向かい合ってその間合いまで行かなくてはならないのだ。

そう簡単なことではない。

しかし、青年はそれをいとも簡単に、それも五匹同時にやってのけた。

それが、今の青年 ルークの実力なのである。

「よしっ！ 帰るか」

剣をベルトに収めて、靴の中にはさんでおいた小刀を取りだしてから、魔物の体皮と肉の間を丁寧に切り取る。それが終わったら魔物の牙を歯ぐきを切り裂いてから抜き取った。

この作業を五匹分繰り返し返して、ルークは村に帰った。

「ただいまー」

「お、帰ってきたな」

青年は村の入り口に立っている門番のような男の元に向かった。

「今日はどうだった？ 大漁か？」

「んー、まあまあかな？ 二十匹ぐらいだよ」

「それをまあまあ何て言うのはお前ぐらいだよ、ルーク」

苦笑しながら男はルークの頭をクシャクシャとかきまわした。

「……何すんだよ」

「いいだろ、自分の息子の頭を触るくらい」

門番の男はルークの父、カイザだ。

茶髪の癖っ毛に目尻が下がっている目元は、ルークの醸し出す空気とまた違つて、温和や安心を与えてくれる。ルークとカイザの共通点と言つたら、きつと髪の毛の色ぐらいだろう。

「いや、これ結構恥ずかしいんだけど……」

「むうう、息子が最近ドライになってきてしまった。これが反抗期と言つヤツか！」

「別に反抗してないと思うけど……？」

カイザは誰の目から見ても親バカである。

「まあ、それは後で話し合つとして」

「え、話し合つところ何かあつたっけ？」

「……息子よ。父さんをあまりいじめないでくれ」

黒い影を背負つてうなだれている門番。

今なら、どんなヤツでも侵入できる気がする。

「分かつたよ。で？」

「早く、村長に報告をしてきなさい。もうそろそろ、時間になるから」

カイザに言われてルークは太陽の位置を見る。
もうだいぶ傾いていた。

「うん、確かに。分かった、行ってくる」

「おう、行つて来い」

カイザに背中をバンツと叩かれて村に入り込んだルークは、真つ先に村で一番大きな建物である村長の家に向かった。

村の建物は、森の木を使って作られている。

建物を建てる際、魔法などは一切使用せず、村人全員で一つの家を建てるのが基本だ。一つ一つの作業を丁寧になし、時に失敗することもあるが、それでももう一度一からやり直して、完成させている。

それは村発足の時からの決まりとなっている。

仲間意識を高めるためらしい。

そうやって今の村になっていったが、発足当時から随分と外観は変わったという。

それが時代の流れなのか、はたまた成長なのか、彼らにはどうでもいいことだろう。

しかし、変わりゆく中でも変わらず残っているものがある。

村の決まりもそうだが、この村のシンボルともいえる建物。

それが村長の家だ。

長い年月を感じさせる。材料となっている木々は所々色が変わり果てており、少し壊れている部分もある。だが、どんな家よりも、絶対に倒れなさそうな何かを思わせるものがあつた。それが歴史だろ

うか。

ルークはコンコンとドアをノックしてから村長の家に入った。

中は外から見た程、色褪せてはいない。

整理整頓され、手入れが細かいところまで行きとどいている。

むしろ綺麗とさえ思えるほどだ。

ドアから真つすぐ進むと、これまた木製の長方形のテーブルがあり、そこに肘をつけながら、じっとしている老人がいた。

「村長、狩りを終えてきました」

ルークがそう声を出すと、村長の体がぴくつと跳ねて、捉えどころのなかった目線をルークに向けた。

「おお、終わったかい？ 御苦労さま。どんなものが狩れたかい？」

「どうも。えっと、ウルフの毛皮と牙とです。最後に珍しく黒い体毛の魔物を狩ることが出来たので、その牙と毛皮は少しもらっておこうかと思います」

「む？ 黒い魔物かい？ ……まあいいか。うむ、報告御苦労」

「はい、では失礼します」

ルークは村長の家から出て行った。

「まさか黒ウルフを倒してくるとはの。それも複数。……カイザヤ

あやつも言っておったし、もういい時期かもしれんな」
誰もいない村長の家で、彼は一人ではつりとつぶやいていた。

「！？」

村長の家を出てから、自宅に向かって歩いているルークは、急に感じた気配に即座に対応して身を地面スレスレまでかがめた。

刹那、頭上をビュンツと風を切る音が通り過ぎる。

その音を確認したすぐ後、かがんだまま上体を起こし、腰から剣を抜いて気配の元の首元に当てた。

「……成長したな、ルーク」

視線の先にいるのは三十代くらいの男。

剛気を纏わせる体躯と常に獲物を狩るような獣のような目つき。知らない人が見れば、決して近づいてはいけない人、と判断するだろう。そして何より特徴的なのが、額から生えている角だ。

「ありがとうございます、師匠」

十五センチほどの大きさを誇る角を持つ男。
彼こそがルークの人生で二人目の師匠であった。

ルークと男はしばし睨みあった後、やがて男の方から、ふーっと息

を吐き、体の力を抜き去った。それに合わせてルークも力を抜く。

「お前らが来てからもう六年か……ずいぶんと経ったな」

男は、先ほどの剛気を風にでも流したように、優しい落ち着いた雰
囲気に変わっていた。

「はい」

「そして、俺の元に来てからちょうど五年が経った」

「はい」

「覚えているか？ 五年前の今日、お前は土下座して俺に懇願して
きたんだ。鬼人族の俺の元に、人間のお前が、だ」

「はい」

「あのときはびつくりした。人間がこの村に住んだこともそうだが、
何よりも、あれだけ人間至上主義の人間族が、弟子入りしてくるな
んてな」

「はい」

くつくつく、と当時を思い出して、男は楽しそうに笑っていた。

「なあ、この村の師弟関係の決まりを知っているか？」

「『師弟関係を結んでいる限り、森の外に出てはいけない』ってや
つですか？」

「それ以外に」

「……いえ、知りません」

男は急にさびしそうな顔をして、言った。

「『師弟関係を結べるのは五年間だけ。その先は友として関係を結
ぶべし』ってやつだ」

その言葉を聞き、ルークは表情を崩した。

「それって」

「つまりだ、今日で俺の弟子は終わりってわけだ」

ルークの言葉を遮って、男は何かをこらえるように言った。

「だからな、お前は行っていていいんだぞ？」

「……どこにですか？」

意地なっているようなルークを見て、さびしそうな顔から苦笑に変えた。

「王都だ。お前はやりたいたいことがあるって言ってただろ？」

「……………」

「俺はカイザと前々から話し合ってたな、そろそろいいんじゃないかと、判断したんだ」

「……………」

「カイザの話だと、一週間後に王都のどこかで試験があるらしいし、ちよつどいいんじゃないかってな」

「……………」少し考えさせて」

「何を言ってたんだ馬鹿もん！」

ください、とルークが言おうとしたところで、後ろからよく聞いている声が怒気を孕んで聞こえた。

振り向けばそこにいるのは父　カイザであった。

ルークはカイザを見た瞬間、眼を丸くした。

（父さんが……怒ってる？）

カイザは昔からルークにベタ惚れだった。
どんなにルークが迷惑をかけても、いたずらをして、笑顔を見せて「しょうがないな」と言うだけで、全くと言っていいほど『怒り』という感情を見せたことがなかった。
そんなカイザが……怒っている。

いつもの笑顔でもなく、息子にいじめられてうなだれている顔でもなく、今までルークに見せたことのないような、顔を真っ赤にして、柔らかな目をキツと吊り上げて、そんな顔で、ルークの前に立っていた。

「何のために、ここまで頑張ってきたんだ？」

低くルークを突き刺すような声で、問う。

「守りたいんじゃないのか？ 安心させてやりたいんじゃないのか？」

この六年間の彼の思いを。

「それとも……その程度なのか？」

「父さん、俺剣を極めたいんだ！」

ルークがカイザにそう言ったのは七歳のある日のこと。

その日のルークはいつにも増して、体がぼろぼろだった。

最近のルークはよく村の子供たちにいじめられているらしい。

その原因が所有属性がない、魔力がない、というたったそれだけの理由であったことに、カイザは腹が立った。

幾度となく、子供たちをぶちのめそうとしたが、怪我をしたことをいつもひた隠しにしているルークを見ると、どうしても踏みとどまってしまう。

幸い、エリーがルークと仲良くしてくれているみたいだから、いつかルークが自分を頼るまで介入しないようにしていたのだ。

そして、ついにルークはカイザを頼ってきた。

しかし、それは思ってもみない頼みだった。

『剣を極めたい』

それを聞いて、カイザが真っ先に思ったのは、この子は何て強いんだろう、であった。

普通の子供なら、『助けて』と救いを求めるのに、ルークは『自分で何とかしたい』と、そのための力を求めたのだ。

ただ、その力の使い道は間違えると、ルーク自身もいずれ滅ぼしてしまう。

だから、カイザは聞いた。

「なんで極めたいんだ？」と。

その問いにルークは考えることもなく、すぐさま答える。

「大切な人を安心させたい。それと、守ってあげたい」

これがルークの答え。

これがルークの求めるモノ。

こんなにも純粹で、こんなにも強い意志を持っている。

それならば

「いいだろう、ルーク。俺が鍛えてやる」

正直、カイザは普通の人よりは実力がある、くらいのレベルだ。

とてもでないが、ルークの求める『剣を極めさせる』ことなんてできっこない。

だから、カイザは覚悟を決めた。

「この村を出るぞ」

外の世界にルークに触れさせ、あらゆることを吸収させる。

なにより、多くの経験を積ませる。

この点に置いて、村を出てルークと共に修業の旅に出ることを決めたのである。

「俺は、あの時決意したぞ。お前に剣を極めさせる『まで』が、俺に出来る最高の愛情だって、俺は決意したぞ！ お前の決意はどうした？ 悩むな、考えるな、本能のままに進め！ お前は、それが出来るくらいに力をつけたはずだ！」

カイザの鮮烈の気持ち。

それは使命や義務に近いモノがあり、ただと違う愛情、そして贖罪。

「『無能』な体で産ませてしまつてすまない」

「いじめられるような原因を作つてすまない」

そう胸の奥からの悲痛の叫び。

そう思うからこそ、カイザは伝えた。

ルークは、その言葉に、静かに、頷いた。

その決意はあの頃と全く同じで、むしろ膨れ上がっているくらいで、より強く思うことが出来る。

「決めたよ。俺……王都の学院に行つてくる！」

その言葉にした瞬間、空が、世界を覆う空が、青く微笑んだ。

まるで、母親が子の成長を喜んでいるかのように。

旅立ち（前書き）

開いていただいております。

今日、日間ランキングで小説を探したらこの小説があっぴきりしました。

これからも、よろしくお願いします。

旅立ち

それは旅をはじめて一年くらい経ったある日のことだった。

修業だけを目的として旅をしていたため、ルークとカイザには明確な目的地というものを持っていなかった。

だが、そんな彼らが初めて目的地を決めた。

「鬼人の森に行こう」

二人がこのことを決めた理由は二つ。

一つは鬼人の森の周辺にある『王国認定狩り場』は行きつくしたため、新しい刺激と世界が欲しかったから。

もう一つは、一年間の成果を見るいい機会なのかもしれないと考えたからだ。

二人には自信があった。

それは、決して村にいた頃には体験することのできなかったサバイバルを経たという経験を得たことが一番大きい。

だから、当然通用すると思っていたのだ。

人はこれをうぬぼれという。

そのことを、すっかり忘れて。

鬼人の森の東部から入りこんだ二人は、始めのうちは順調に魔物を倒してきた。

魔物にも人間と同じように、それぞれ実力が異なる。それは必ずしも種類が違うからという理由ではない。同じ種類の魔物でも、ものすごく強いヤツもいれば、一撃で倒せてしまえるようなヤツもいる。彼らが倒していつている魔物も、他の狩り場で見たことのある魔物と同じ種類だが、実力が全然違う。

彼らが今まで戦って来た中でも、どれも上位に食い込むレベルであった。

だが、勝てないわけではない。

今までの相手に比べれば強い。

それくらいの印象しかなかった。

（これは期待外れか？）

カイザはのんきにも余裕な考えを抱きながらも、剣をふるう。

今、二人が相手をしているのは八体のゴブリン。

緑色の肌に、ごつく崩れている醜い顔をしている魔物だ。

数では圧倒的に上なゴブリンは、特に策も考えず突っ込んでくる。

それを二人はそれぞれに散開し、一体一体確実に仕留めて行く。

数がいくら倍以上であってもかかる時間はそう大して変わらないのだ。

最後の一体の首をはねたルークはため息をついてカイザに向けて笑みを送る。

「あんまりたいしたことないね？」

「むう。確かにな」

「とりあえず先に進もうか？」

「ああ、そうだな」

二人は、剣を腰のベルトに収め、森の中心部に進みだしたそうとした。

そう、「だそうとした」のだ。

二人の足はピタツと止まっている。

目の前に、オークがいたからだ。

「……やっと、手ごたえのありそうなヤツが出てきたね」

「うむ、一年間の成果を測るにはちょうどいいな」

二人は人生で初めてみる「オーク」という魔物に、特に怯える様子もなく、それどころか意気揚々と収めたばかりの剣を抜いて構えた。

二人の構えに特に特徴はない。

強いて言うなら綺麗ではない、ということだろう。

もともと、高度な訓練をしていたわけでもないカイザと、その息子兼弟子のルークに、どこぞの剣術の構えなんてできるはずがない。今までの旅の中で勝手に出来上がった構えがこれなのだ。

「いくぞ！」

カイザの掛け声に合わせて、二人は駆けだした。

前にいるのはルーク、後ろにいるのがカイザ。

この陣形を崩さずに突き進む。

「ハアアッ！」

短い気合と共に剣をオークの足元に狙いを定めて切りつけた。オークはゴブリンなどと比べ、とても大きな体を持つ魔物だ。それ故に、下手に首を狙うと自分が体勢を崩してしまい、隙を見せてしまう。

ならば、足を狙って行動範囲に制限を加えたほうがいいだろうと判断したのだ。
だが

「!？」

切れない。

いや、それどころか……傷一つ付いていなかった。

「ヤアアアッ！」

ルークが驚いている間に、後ろからカイザがオークに向かって飛び込んできた。

（ルークの攻撃が通じていない点から見て、硬度が他の魔物とはけた外れて違うのだろう、だったら！）

カイザは剣の刃を横に傾け、刃のない部分で思いっきり叩きつけた。ガンツという鈍い音の後、オークは体をよろめかせる。

「今だ！」とカイザはルークに向けて叫ぶ。

ルークもすぐさま対応して、剣を横に傾けオークの頭に横から叩きつける。

すると、衝撃に押されてオークは横に倒れた。

「よしっ！」

「やったか!？」

倒れたオークを見て、二人は確かな手ごたえを感じた。
あれだけの衝撃、くらはば死なないにしても気絶くらいはするだろう。

彼らはそう思い、胸の内でガッツポーズをする。

「さてと、止めを刺すぞ？」

カイザはそう言って、オークに近づいて行く。
オークの前に立って剣を下に向けて持ち上げた。
あとは、これを下ろすだけ。

そこで、カイザは思いもよらぬ衝撃を受けた。

「!？」

後ろからもう一匹オークが現れたのだ。

「父さん！」

ルークが叫ぶ頃にはカイザに意識はなかった。

ルークは剣を持ちなおして、オークに突っ込んでいく。

「ウオオオオオオッ！」

剣を振り、オークに衝撃をぶつける、がオークは腕でガードをし、
片方の腕でルークを吹き飛ばした。

「ぐああっ！」

飛ばされたルークは何本かの木に当たった後、転がるように地面を滑っていく。

やがて摩擦で止まり、体を起こそうとするが、起き上がらない。骨が何本か折れてしまったようだ。

（くそ……どうする！？　なにかあるか？　いや、それより父さんは！？）

不安、心配、恐怖など、様々な感情が胸の内で渦を巻いているルークは、どうにか眼球を動かして現状を確認しようとするが、徐々に痛みで意識が薄れて行き　完全に落ちた。

オークは近くの人間の元へと向かった。年は三十くらいの男。今は倒れており、絶好の獲物となっている。その男の頭を掴み、口を大きく開けた。

その瞬間。

「ンガアアアアアアッ！？」

オークの腕はそこにはなかった。あるのはぱつくりと切り裂かれている肩の部分のみ。オークは悲鳴に近い声を上げ叫んでいる。

そんなオークの前に、今までそこにいなかった男が現れた。
角を象徴としている種族　鬼人族の者だ。

男は手に持っている剣を一回二回と振る。

はたから見れば、ただ剣を振り回しているようにしか見えない。
だが、次の瞬間、オークは唯の肉の塊と化していた。

「ふん、人間か」

肉の塊など目にもくれず、男がまっさきに視線を向けたのは下に倒れている人間族の男だ。

侮蔑を含むものでいいで、男は人間族の男を持ち上げた。

そして少し歩き、同じく地面に倒れている少年も持ち上げる。

（村長にとりあえず報告するか）

男は二人を担いで、森の中央に向かった。

「ん……うん」

何やらいい匂いがする。

甘く、素朴で、自然の香り。

まるで大地のど真ん中にいるかのような、そんな香りだ。

ルークは瞼を開けた。

見えたのは知らない天井。

「起きたか？」

ふいに近くから声がした。

体を起して見てみると、ベッドの横の椅子に座っている男がいた。年は三十くらいで、するどい目つきをして、なんだか近寄りがたい雰囲気醸し出している。そして一番の特徴が、男の額に生えている角だ。

「はい、起きました。……あの、ここはどこですか？」

「ここか？　ここは俺の家だ」

「はあ」

要領を得ていない返事のルークに呆れてため息をつく男。

「……状況を理解していないようだな？　いいか、お前達は鬼人の森でオークに殺されかけていた。そして、そのオークは俺が始末した。そのままお前たちを放置しておく気分が悪いから、村まで連れて来て看病した。以上だ。分かったか？」

「……はい。　！？　父さんは！？」

「オークの馬鹿力をモロに喰らったからな……死んではいないが重症だ」

それを聞き、ほっとするルーク。

（むしろ、心配なのはこいつの体なんだけどな。……あの重傷をたった一日寝ただけで回復するなんてな、普通の人間じゃないだろう）

人間が鬼人村のオークに一撃でも喰らえば、重症になるのは当たり前

前、どちらかといえば死ななかつたことは不幸中の幸いと思えるくらいだ。

だからこそ、カイザとルークの二人が瀕死直前の重傷を負うのも例の通りだ。

だが、男が『異常』と感じたのはルークの回復力だ。

全身十か所近く骨折に内臓はメタメタに潰れていたルーク。

それが一寝た今では、上体を起こすまでに回復している。

普通の人間ならば、ここまで回復するのに半年くらいはかかるものだ。

異常という枠すらも超える異常性だ。

「あ、あの〜」

「ん、なんだ？」

ルークは不安そうな顔で男に話しかけた。

「俺達はいつまでここにいていいんですか？」

「ああ、そのことか。それなら、昨日村長と話し合って、お前らの体が完治するまでここに住まうことを認められた。つまり……だいたい一年近くだ」

傷が癒えるのに半年、体を動かすことが出来るようになるのに半年、という計算だ。

わざわざ完治するまで、と考えた村長に、男は少し驚いたが、それが村長と言う者の器か、と納得した。

「今日から一年間お前らは、俺達鬼人の村の住人だ」

「今日が旅立ちの日か」

男はあの日のことを思い出して、椅子に座る。

あの頃の彼は人間を嫌っていた。

傲慢で、自分至上主義で、常に他種を見下して。

何よりも、平穩を崩す。

だから、人間が嫌いだった。

では今はどうか？

「フンっ、一人前にいい目をしていやがつて……」

優しい目つき。初めて彼らと対面した時の侮蔑するような顔は幻の如く消え去り、それは成長を喜ぶ親に誓い顔なのかもしれない。

「もう、俺はお前の師匠なんかではないんだ。これからは友として、その胸に刻んでおけよ。俺の名　ジークという名をな」

小声で呟きながら、男　ジークは自分の剣の手入れをし始める。

今日からは、ルークの分まで自分が狩らなくてはいけないから大変だ。

彼は終始滅多に見せない笑みを浮かべて、準備をしていた。

この村には決まりがある。

狩りに出て行く者たちには、行きの見送りと帰りの出迎えを必ずしなければならない。

だが、狩りに行くのではなく、旅立ちをする者には見送りをしてはならない。

それは、『旅立ちの儀式』だ。

これから村を離れれば、もう村の人はいない。自分で生きて行かなくてはいけないのだ。

だからこそ、見送ってはいけない。

その場は覚悟を見直す最後の機会なのだから。

カイザはそう、村長の話を聞いて、驚いていた。

別にその決まりについて驚いたわけではない。

彼自身の心境に驚いたのだ。

（何だろうな、この安心は）

きっと、ルークが旅立つ時はさびしくて、心配で、行かせたくなくなるんじゃないか？

彼はこう思っていた。

だが、実際は全くと言っていいほど感じていない。

確かに、さびしい。

最愛の息子が自分の元を飛び立ってしまうのだから、それは当然だ。しかし、それだけではない。

他に、誇らしく思う自分もいる。

今のあいつなら大丈夫だ、と思う自分がいる。

（そうか　あいつはもう、俺を安心させられるほどに成長しているんだ。……もう、子供じゃないんだな）

子供はいつか、親の元から飛び立つ。

その時の親の心境は様々だ。

悲しい、さびしい、つらい、憎い、切ない、喜ばしい、うれしい。

カイザは今、最高にいい気分だ。

「お前なら、やれるぞ！」

カイザは胸の中でルークの頭をくしゃくしゃにしてから、背中を押す。

仮想ルークでやるのは、いささか寂しいモノがあるが、今のカイザには関係ない。どんな形でもエールを送ってやりたかった。

「行つて来い！」

「あれからなんだかんだで居ついたんだっけ？ 懐かしいな」

ルークは六年間過ごした村を眺めて、記憶をたどっていた。

そこから溢れてくるのはいい思い出ばかりだ。

旅をしていた頃も楽しかったけど、ここに来てからもとても楽しかった。

以前の村では感じることでできなかった『繋がり』というものを直に触れ、優しさに触れ、自然に触れ、世界に触れ、ルークは体や剣

技だけではなく、心も成長できた。

「本当に、恵まれているよな、俺」

こんなにも素晴らしい村に住むことが出来、こんなにも温かい思い出を貰って、これを恵まれていると言わずして何と言えようか？
そう素直に思うことが出来る。

ルークが今立っているのは、村の門の前。

ここを決意を持ってくぐるからこそが、旅立ち。

目を閉じて己の真価を改めて問う。

（俺はどうしたいのか？ 何がしたいのか？）

出発前に怖気づいたのか？

いや、そんなことはない。

これは最後の覚悟。

これから迷うことなく、その道を突き進むための、最後の覚悟だ。

ゆっくりと目を開けて、口角を吊り上げる。

「決まっているだろ！」

ルークはその線を超えて、旅立った。

本日快晴の空模様。

青が世界を覆い尽くす中、一瞬だがわずかに色が桃色を含む色になった。

旅立ち（後書き）

学園編まであともう少し……頑張ります。

再会（前半）（前書き）

開いていただいてありがとうございます。

先ほど開いてびっくりしました。

日間一位。

確かに、投稿するからには一回は一位を獲ってみたいとは思っていましたが、まさかこんなに早く実現するとは……。

お気に入り数も1000人を超え、至極光栄に思います。

こんな駄文ですが、これからも読んでいただけたら嬉しいです。

再会（前半）

王都『ベルゼア』と『鬼人の森』の間は、二十キロほど何も無い荒原が広がっている。

草木は生い茂っておらず、水っけを感じさせない大地には、水分をあまり必要としない草が、厳しい環境に耐えきって初めて実らせる薬草が、風で粗く削られた岩くらいしかない。

道も舗装されている様子もなく、人の気配も全くと言っていいほど感じない。

「……寂しいな」

そんな荒原にポツンと歩いているルークは、ついつい言葉が口から出てしまった。

村を出てから三日目。

森から降りる際に、門出のプレゼントと言わんばかりに魔物が次々と襲って来て大変だった。

ルークは最後に、と思ってご丁寧に一体ずつ確実に仕留めてやった。その際に剣にこびりついた生臭い血の匂いがさらに魔物を呼んで、そいつらを片づけて、また魔物が集まって、片づけて、とその繰り返しだった。

ルークの予定としては二日もあれば森を抜け出せるはずだったが、結果的にそのせいで時間を余分に消費してしまった。

無人の荒原に、血の匂いが風に乗って漂っていく。
しかし、ここは森ではない。

魔物も来る気配がない。

とても静かで寂しい地。

何だか昔の自分を見ているようだ。

ルークはそう感じて、いつかこの地を草木でおい茂らせたいな、何て思いながら、てくてくと歩いて行った。

森をぬけ出してから約二時間半。

ルークはついに王都にたどりついた。

「ここが……」

目の前に高らかに存在している門を見上げて、ルークはポカーンと口を開く。

今まで誰かの口づてでしか聞いたことのなかった王都、それを間近に見て、想像以上の圧倒感があるのに、驚愕を隠せないのだ。

今まで見たどんな防壁よりも存在感を放ち、そこから先へは行かせんと、気迫が伝わってくるほどだ。

ルークは数分、そのまま木を失っているようにも見える表情で眺めてから、門に向かった。

門には数人の門番が槍を持って、王都に入ってくる者の身元を確認している。

「おいお前、身分証明をするものはあるか？」

一人のがたいのいい門番が、ルークの元に歩み寄って、高圧な態度で聞いてきた。

門番が高圧な態度を取るのは、ルークが明らかに冒険者の恰好をしていたからだ。

鬼人の村で織られた土色のシャツ、その上には薄汚れた、コートというにはやけにモノさみしさを感じさせる布をかぶっている。同じく村で織られた大きめのズボンに、裾まで覆う安物の靴。腰には細長い剣がつるされている。

誰がどう見ても貧乏冒険者だ。

「……あの、俺、田舎から来たもので、身分を証明するものを持ってないんですよ。どうすればいいですか？」

ルークは、門番の態度など気にせず、自分の要件を聞いた。

「む？　そうか。ならばこっちについて来てくれ」

そう言って門番は門の端っこにある小さな小屋に入っていく。ルークも後を追って入っていく。

「失礼します」

丁寧に頭を下げ、門番が座っている机に座った。

「ではまずこれに名前と年齢、を記入してくれ」

ルークは小さな何も書かれていない真っ白な紙を渡される。そこに名前と年齢を書いていく。

（えっと、名前はルークで、年齢は十五つと）

昔からカイザにはせめて自分の名前と数字くらいは書けるようにしないと、と言われて学んだのが役に立った瞬間だった。

「書き終わりました」

「よし、それなら次はこの水晶の上に血を一滴流してくれ」

門番は水晶を机に置いた。

それを見て、一瞬昔の検査のことを思い出したルークだが、すぐに首を振って頭から掻き消す。

ルークは唇を歯で軽く噛み切って、右手の親指でそれをすくい取る。

「ほう、普通の奴ならバカ正直に指を切るんだが……お前、賢いな」
「どうも」

ルークは剣士だ。

たとえ、ギルドに冒険者として登録していなくても、誰かが違うと言っても、彼は剣士なのだ。

その剣士たる彼が、剣を扱う指をわざわざ自分から傷つけるだろうか？

そんなことするわけがない。

剣とは、その剣の重さや構え、持ち方や戦法によって扱いがことなるが、己の手を使う、という点では、当たり前だが同じだ。

少しでも手に傷がつくと、剣をふるう時に違和感を感じるなんて珍しいことでもない。

だから、冒険者や騎士、ルークのような自称剣士の大半はグローブをはめているのである。

ルークはすくい取った血を水晶に垂れ流した。

血が付いた水晶は白く光り出す。

その水晶に、門番は先ほどルークが書いた紙切れを水晶にあてがう。するとどうだろうか、紙切れは水晶に飲みこまれるように中に入っていく。

やがて、全て入りきると水晶の光はさらに輝きを増し、形を変えて行く。

それは四角形のようなものになり、光は消えた。

「よし、これで登録完了。これからはこのカードを身分証明に使え」

ルークは門番に渡されたカードを見る。

そこには名前と年齢が書かれていた。

不思議な気持ちだ。

鬼人の村にいた頃も、それ以前に住んでいた村にいた頃も、そこに居座って生活していれば、自然と自分と言う存在を認識はしてもらえていた。

自分の身分証明など、考えたこともなかった、というよりも知っていてもらって当たり前、と思っていたルークにとっては、カードに記されている『自分』がとても新鮮なのだ。

そしてそれは、手にしてからさらにその感覚が湧きあがってくる。

「？」

ルークは自分の名前と歳の下が、不自然に空いているのに気がついた。

「この隙間は何ですか？」

「ん？ ああ、それは他の情報を記載するためのものだ。たとえば、

職業やその職業での立場、資格、成績などだ。それらは、仕事に就いた時にその職場で登録するものだから、今は出来ない」

つまり、ルークが持っている身分証明はまだ未完成と言うことになる。

「へえ……分かりました」

と、頷いてカードを見る。

すると今度は、空欄の最後に剣と冠が重なっている紋様が付いているのに気がついた。

「この紋様は？」

「その紋様は、王国で作ったという証だ。その紋様を持つものだから、決して愚かな行動はしないようにしろ、分かったか？」

「え、あ、はい」

「あと、それをなくすと、もう一度ここで発行することになる。が、なんらかのペナルティーが科されるので注意しろ」

王国の紋様を持つものだから当然だろう。

ルークは納得し、「分かりました」と告げる。

「もう質問はないか？」

「はい、ありません」

「よし、それならもう行っていいぞ」

「ありがとうございます」

ルークはポケットにカードを入れてから一礼して、小屋を出た。

小屋の扉を開けると、風がビュウと顔を叩いてくる。

その風に顔をしかめて目を手で隠した。

今日は風が少し強いかな、ルーク思いながら手越しに王都の街並みを見る。

「!？」

「へいいつらしゃいつ！」

「そのガタイのいいお兄さん！　ウチの武器はどうだい？」

「冒険者のお供といえばコレ！　速攻性のあるポーション！　お買い得だよ！」

「店主直々に魔術を組み込んだ鎧……買わなきゃ損だよ！」

「え？　まけてくれって？　……しゃーねーな！　もってけ泥棒！」

そこにはルークの知らない世界が広がっていた。

一本の道。

その道の両端を沿うようにして数え切れないほどの店が奥まで連なっている。

そして、驚きなのが道を行き交う人の数だ。

ルークは今までこんなにも多くの人々を一度に見たことがない。

以前いた村、鬼人の村、二つの村人を足しても、全然足りないだろう。

「一体これは……」

ルークは魂が抜けた様に体をふらつかせながら道に入っていく。

すると

「お！　そのひよろそうな兄ちゃん！　今ウチで、軽量に特化した剣を売ってんだが……どうだ？」

「へい！　その青年！　王都特製の甘酒！　どうだい？」

「おっと、若者よ。冒険者ならもつと身なりに気を配った方がいいぜ？　ウチによっていきなよ！」

獲物を捉えるハンターの如くいろんな店から、熱烈なアタックを受けた。

「え、あ、……へ？」

間抜けな声を上げながら後ずさるルーク。

初めての体験が唐突に襲ってくると、人はこうなるのか。

……いや、彼の場合はただ店員の勢いに押されているだけである。

「なに！？　剣じゃなくて槍が欲しいだ！？　よし分かった！
特製の槍を売ってやろう……どうだ？」

「むむむ！　酒が飲めないだ！？　フンツ！　安心しろ！　そんな青年にピッタリなジュースがあるぜ？　どうだい？」

「なんと！　その格好がポリシーだというのか！？　ふっふっふ、おもしろい。その考えを打ち砕いて新しい世界を見せてやる！　だからウチによっていきなよ！」

ルークはこの瞬間、かつてないほどに己の中にある警報が最大級のレベルでなり引いているのに気付いた。

（このままじゃまずい）

先ほど勢いに押された自分をしっかりと胸に取り戻し、頬を引きつらせながら、後ずさっていた体勢を整える。

そして体から余計な力を抜き、肌で空気の流れを感じる。

今日の空気の流れは少しうねっているようでややこしいが、彼にとつては大した差でもなかった。

ヒュウウウ、と小さな風が吹く。

それは歩く人々の髪を少し浮かす程度の風だ。

だが、そんな弱弱い風に流されたかのように、彼はその場から消えていた。

「「「あれ？」「」」

ルークを勧誘していた店員たちは瞬きをする。

それから首をひねって各々自分の店に戻った。

ここは様々な人が行きかう王都『ベルゼア』

不思議なことなんて日常茶飯事である。

王都『ベルゼア』

王国最大の広さを持っている王国の中心都市。

都市の形は円形に広がっており、その枠をそるようには防壁が囲っており、東西南北に一か所ずつ出入りが可能な門がある。そこから依頼をこなしに行ったり、取引をしに出て行ったり、あるいは外交の

たぬに出ていたり、している。その逆もまた然り。

王都の中は商人や芸人や観光人や冒険者やらで常ににぎわっている。ルークのように外から来た者は、「祭りか何かだろうか？」と勘違いをしてしまう程だ。

一本道を経て横に敷き詰めた道沿いに店が連なっており、それはまるで祭りの店構えをしている時とほとんど変わらないので、毎日が祭りといっても差し支えない。

もつとも、国王の誕生祭や建国祭の時は、この比にならないぐらいに熱気漂い、賑わっているのだが。

ベルゼアの最大の特徴と言えば、大陸屈指の魔術師の育成機関があることだ。

有能な魔術師は、所有属性の数と魔力によって定められている。

それは、生まれ持った才能が全てを言う。

人々はそのことを理解はしていたが、納得はしていない。

だから、色々な可能性を模索し始めた。

ある者は「火」の属性を得るために火山に飛び込み、ある者は強い魔物を倒せば魔力が上がると信じ、ある者は属性を持っている者と体を重ねればその属性を得ると思ひこみ、ある者は属性を持っている者を殺せば、自分がその属性を得ることが出来ると考え 各々が実行した。

結果は明らかであった。

火山に飛び込んだ者は塵も残さず灰となり、強力な魔物に挑んだ者は無残にも食い散らかされ、体を重ねた者は属性の代わりに意志なくして子供を授かり、人を殺した者は、その狂気に体が飲まれ、本

物の殺人者になってしまった。

これ以外にも多くの持論を試したが、人々は結局属性を得ることも、魔力量を増やすこともできなかった。

魔力や属性は神様から与えられたものなのかもしれない。

人々はそう考えるようになり、誰もが魔術の成長を諦めた。

そんな時だった。

王国で一番の魔術師である男が、現実には打ちひしがれている人々にこう言ったのだ。

『所有属性の数や魔力を増やすのはたしかに現状無理だ。それは仕方がない。だが、そこで立ち止まってはならない。今、所有属性や魔力を増やす以外にも出来ることがあるだろう！ 魔力のコントロールや術の精度、モーション……出来ることは山ほどあるはずだ！ もし、学びたいと思ったなら、少しでも向上心があるなら、俺の元に来い！ 才能に固執しているその硬い頭を目覚めさせてやる！』

その言葉は、多くの者の胸に突き刺さり、自分を見直させ、『出来ることをやる』という簡単な発想だが、とても大切なことを思い出させてくれたのだ。

そこから男の周りには人が集まり、彼らは出来ることを増やしていった。

人は増え、いつしか王都を、いや王国中からも人が集まり、いつしか国王自身も動かざるを得なくなったのだ。

こうして出来上がった魔術師の教育機関が『王立第一魔術学院』。

後に魔術師増加のために第二、第三と増えて行く学院の第一歩である。

少女は第一魔術学院の誰もいない図書室で勉強をしていた。

大きくキレ長い瞳に一本の筋が通ったような鼻、少しやせ過ぎなのか顔はほっそりとしている。その顔の両側に長く薄い束の髪が垂れており、残りの髪は後ろにまとめて束ねている。誰もいない図書室で、真剣そうな表情で勉強するその姿は、誰もが見とれてしまう程似合っていた。

少女が読んでいるのは『所有属性の可能性』と呼ばれる書物だ。

これは、どこぞの魔術師が書いた、あくまで『可能性』について色々な意見が述べられている。

少女が注目しているのは、その『可能性』の中のある項目である。

『所有属性の増加に関して』

曰く『現在、所有属性の増す方法は、確立するどころか不可能とさえ言われている。その一番の理由は、原因すら判明されていないことにある。人は、いやどんな種族でも、生まれながらにして、脳や心臓、腕や足といった体の一部と同じように持っている。これは神の恩恵によるものだ。そこに確固たる理由はない。男女の行為が神に届き、そこから神が男女に子を授ける。つまり、その子の体に何か差があるとしたら、それは神の恩恵の差によるものであると考えるのが妥当だろう。つまり、所有属性の数が多い者はそれだけ神に愛されていると考えられる。ただ、これはあくまでも私の持論だ。実際は神の恩恵の差かどうかなどは分からない。それこそ、神のみ

ぞ知る、といったところであろう。』

少女は本を机の上に置いて、体を伸ばす。

「あんまり参考にならなかったなー」

本日少女が読んだ本は四冊。

それぞれの本の至るところまでくまなく読みふけてみたが、少女が欲しい情報はなかった。

（ま、当たり前よね。もし、そんな方法が確立していたら今頃大ニユースになってるだろうし）

少女が欲しい情報は『所有属性の数の増やし方』。

それは、少女が昔からの想っている少年にとって必要な情報である。彼のために本を調べ、人に尋ね、あらゆる可能性を模索して、もう七年になる。

この図書室に置いてある本は一通り読み終えたが、どの本もさつき読んだ本と同じようなことし書かれていない。

つまり、『神様の恩恵』こそが、魔術師の才能に大きく影響する、ということだ。

（あいつが……あいつが神様に愛されていないって言うの？）

少女は顔を振る。

（そんなこと認めない！）

少女の目には闘志が宿る。

少女は信じている。

彼が神に愛されていると。

だから、その証を形として与えてあげたい。

少女の決意は七年前のあの日から変わってない。

いつか、強くなったルークが私の前に来た時、私は最高のプレゼントを送ってあげたい。

少女 エリーは、むんつ、と小さく胸の中で拳を握り、また新たな本を読みにかかった。

まさか、ルークがすぐ近くにいたとは夢にも思っていない……。

再会（前半）（後書き）

タイトルでは「再会」となっていますが、前半では会いません。
次に投稿予定の後半で出会います。

これからもよろしくお願いします。

……なお、誤字脱字がございましたら、遠慮なく言ってください。
お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5733y/>

唯一の治癒剣士

2011年11月20日14時57分発行